

戦前アナキズム運動の農村運動論

——その1 自連派——

三 原 容 子

The Theory of Rural Movement in the Anarchist Movement
before World War II — Part I on JIREN-HA

MIHARA Yoko

はじめに

「農本主義」という語は、歴史用語として権藤成卿、橘孝三郎、加藤完治らの特定の思想をさす狭義の用法以外に、文字どおりに農を本とする思想という広い意味でも使われている。丸山真男氏が「農本主義」の特徴とした「反都会的、反工業的、反中央集権的傾向¹⁾」もかなり広義である。二つの用法の区別が曖昧なまま、国家主義的な「農本主義」と「農業見直し論」や「共同体見直し論」等が重ね合って連想されたり、「農本主義的」思想内容の範囲の拡張が行なわれているのが、農本主義理解の現状である。

さて、アナキスト石川三四郎に対して綱沢満昭氏は「農本的なる」という形容を冠した上で、「農本主義的アナキズム」といったものが存在可能かと問い、「あらゆる権力を拒絶しようとするアナキズムが、天皇制と結果的には癒着する運命をたどるしかなかった農本主義と結合するなどということは論理的にはまったくあり得ないことではある²⁾」と断定する。ここには現状の農本主義概念の曖昧さが露呈されている。と同時に、石川の反商工的＝「農本主義的」思想がアナキズム中で異質に感じられたのは、今日の一般的アナキズム理解が幸徳秋水や大杉栄周辺の狭い範囲に限られているからではないか。

しかし、農本主義を農を本とする意味で用いるならば、アナキズム思想史上にはほかにも「農本主義的」な思想が少なくない。石川の師のカーペンター³⁾やトルストイ⁴⁾ら西欧の思想家のみならず、日本でも本稿でとり上げる自連派をはじめとして反都会的反工業的色彩の濃厚な人々が多い。戦前のアナキズム系詩人の多くがアナキズムと「農本主義」の未分化の内にあったともいわれる⁵⁾。ここに左翼思想のアナキズムと、広義の農本主義との深い関連が推測されうるのである。

本論の意図は日本のアナキズム運動中の農村運動論を明らかにすることによってアナキズムと農本主義の関連を探るにある。ただし紙数の関係で、今回は諸派中の自連派（全国自連残留派）のみを扱い他派については別の機会にゆずる。

自連派は歴史上次のような位置を占める⁶⁾。日本労働運動史上のアナルコサンジカリズム全盛期は1921～22年であった。その後1923年の大震災後に大杉栄を失ない、普通選挙法成立等の自派に不利な情勢下で、アナ系（アナキズム系）の運動は衰退への道を歩みはじめた。この頃テロリ

ズムが頻用される。それに対し、従来は単なる反総同盟の結集であったアナ系組合では、その中のアナキズムを明示する組合の全国的連合を進め、1926年5月、ついに全国労働組合自由連合会（全国自連）を成立させた。成立後1～2年で全国自連は二派に分裂して一派が脱退し、分裂は思想運動や文学運動に至るまでアナ系の運動全体に及び、以後数年間、闘争エネルギーの大部分が内部対立に費やされることとなった。

二派中の一つが本稿で扱う自連派で、純正アナキズム派、観念派とも称され、全国自連分裂の際の残留組とそれに賛同する人々をさす。「純正」と自称したことにも窺われるように、アナルコサンジカリズムをマルクス主義とアナキズムの混合物と見て否定し、純粋のアナキズムたらしめた。彼らの理論によると、階級闘争説と労働価値説はマルクスによるもので否定すべきであり、労働組合の対資本金家闘争は山賊の親分子分による分け前争いと見做され否定される。小作料減免等の生活難に発する具体的な問題は、労働運動以外の分野でも軽視乃至否定視された。一方で、クロボトキン⁷⁾の描く無政府共産の理想の正当性・普遍性、アナキズム革命の必要性が鼓吹され、「思想は力である⁸⁾」といった傾向がみられる。分裂当時は多数派であったが、その後の運動は衰微に衰微を重ねていった。

この自連派に対立していた人々の主張は多様であるが、一応代表的団体である日本労働組合自由連合協議会（日本自協、1931年11月に、自由連合団体全国会議より改称）の名をとって自協派と呼んでおく。自協派中のサンジカリスト（白井新平、江西一三ら）が従来からのアナルコサンジカリズムをとり闘争を重視する一方、農民派（犬田卯、鍵田研一ら）は主に雑誌『農民』（第1～5次、1927.10～'33頃）に拠って農業の工業に対する本質的優位性を主張し、のちに日本村治派同盟、農本連盟に加わる者もいた。自協派の代表的人物と見做された石川三四郎は農民派の傾向を持つと共にサンジカリズム擁護に努めた。

両派共にやがて分裂状態への反省が生まれ、1933年に文学団体の合同、翌年には全国自連と日本自協の合同を果たしたが、まもなく1935年末に始まったアナキストの全国一斉検挙によって運動はほぼ壊滅を見た。

第1章 自連派の農村運動論

前述したようにアナ系の分裂で自連派が一派として成立したのは1928年頃であったが、ここでは分裂以前のアナキストによる農村問題への取り組みも自連派として一括して扱うことにする。分裂前に農村に強い関心を持ったアナキストの多くが自連派に属したため、農村運動論は分裂前後で途切れなかったからである。以下、時代に沿って概観しよう。

〔農村への関心（1921～22年）〕大正期後半アナ系の代表的雑誌『労働運動』（第1～5次、1919.10～'27.10）を見ると、農村関係記事はその年の小作争議急増を反映して1921年より登場する。内容は小作争議や小作制度調査関係の報告が主で、「今迄の社会運動者は一向農村を顧みませんでした。今後は……農村にも宣伝下さるよう⁹⁾」との農村からの投書に見られるように、アナキストの農村への取り組みはまだ行なわれていなかったようである。

初めて農村運動用に発行された雑誌が1922年2月発行の『小作人』（のちに第1次とよばれる）で、発行元の小作人社は古田大次郎らの若いアナキストによって農村地帯の埼玉県蓮田に結成された。演説会や座談会等の計画は嚴重な尾行・警戒によってつぶされ、一回の雑誌発行に終わら

ざるをえなかった。誌面は主に小作人の決起を促す文章と各地の争議報告で埋められたが、次のような主張が目立つ。小作人は地主と金持ちから、農村全体は地主と都会から搾取されている。都会は贅沢品や不必要品を生産したり必要品を命の親（食糧）の生産者である農民に高値で売りつけるところであるとする論旨で、これはアナ系の反都会論の嚆矢であった。

〔農村運動同盟の時代（1922～24年）〕農村運動同盟は前述の小作人社の一部に新同人を加えて結成され、機関紙『小作人』（第2次、1922.10～'24.4）を発行した。1923年からはアナ系の有力団体労働運動社より和田久太郎らが加わっている。結成にあたっては「小作人運動は、ただ一筋に、小作人諸君の自主自治的精神を以て発達せねばならぬ⁹⁾」という方針を掲げ、その年の春に有名指導者を集めて創立大会を開いた日農（日本農民組合）との対抗意識を表明し、アナキズム独自の農村運動を目ざした。実際活動では『小作人』発行以外に、地方行脚や地方支部の結成を行っていた。

日農と類似する小作争議報告や小作調停法関係記事は略し、『小作人』の特徴的な主張を見てみよう。基調は農民の困窮の原因を「内においては地主、税金、商人に、外においては都会に搾取されている」ことに見る点で、ここから「都会は農村を搾取することによって、生命を維持し発達して文明を築く¹⁰⁾」という都市批判が生まれたのである。その背景には当時の顕著なシェーレ（農産物と工業製品の鋏状価格差）があったことが想起されよう。都市批判は工場労働者をも含むもので、都市労働者は「彼等の主人たる雇主や資本主の手足となりて、彼等の掠奪搾取を助長し、完成する職分を為すもの¹¹⁾」と、山賊の子分にたとえられていた。

また農村のもつ運動上の重要性を次のように強調している。まず農村は「都会に比して更に多くの自主自治の美風に富む¹²⁾」地域と認識され、将来社会の構成員に好適であると見做された。また「長屋に居る工場労働者の方が、吾々よりもっとよい生活をして居ます¹³⁾」といわれるように、最被搾取階級は労働者でなく農民であるという認識もあった。こうして国民の多数を占める農民の自主自治の運動によって地主や資本家をなくすと共に、「都会自らをして農村に降参せしめ¹⁴⁾」るべきだとする方向が示された。運動方法に関しては農民組合の必要を認めると同時に、組合の組織よりも相互扶助の人間性を信頼して自発的な協同にまかせる方針も提起されている。

この頃よりA.ベルクマン¹⁵⁾の報告をはじめ、ロシア革命後の実態がしばしばアナキスト間に報道された。革命政府による農民の自家用食糧の徴発、服従しない農民の統殺、外貨獲得のための徴発食糧の輸出など、農村の被支配、被搾取を物語る内容で、アナキストに都市と農村の関係を考えることの必要性を一層痛感させる役割を果たした。

〔農民自治会との提携（1926～27年）〕農民自治会（農自）は下中弥三郎、渋谷定輔、石川三四郎、中西伊之助を中心に1925年末に創立され、一時は長野・埼玉を中心に全国的に運動が展開された¹⁶⁾。自連派に比べ、農自の主張はより明確に都市を否定し、都会文化に代わる農村文化樹立の必要性を高唱するものだったが、基本的にはよく似ている。機関紙『農民自治』（1926.4～'28.6）の編集者竹内愛國らは、農自はアナキズム（黒色）ではなく「農民自治主義」（緑色）の団体であると主張したが、創立以来多数のアナキストが参加し、反マルクス主義、反都市、自主自治の運動方針を掲げ、内外からアナ系の農民運動と見做されていた。

自連派でも当初は農自をアナキズム運動と見做して応援した。全国自連機関紙『自由連合』（1926.6～'35.2. 1928年9月に『自由連合新聞』と改題）には両団体の茶話会や祝電の交流など

が見られる。全国自連に属する関西自連、全国印刷工連合会、関東自連の、それぞれの大会で、この時期に農自との提携が可決された。

労働運動を中心とする『自由連合』と平行して、『小作人』(第3次, 1926.10~'28.10)が木下茂らの小作人社によって発行された。農自・自連派提携時代の『小作人』の主張を一瞥しよう。前と同じく「都会は農村を搾取する¹⁷⁾」という意見が基本で、小作人と地主、労働者と資本家、と同様に「都会と農村との利害も反対である¹⁸⁾」とされる。都会では「大概の人は無くても差支のない様な物を作って居るか、何一つ生産しないで食って贅沢をしている殺つぶし¹⁹⁾」であって、「吾等は都会に頼らなくて完全に自主自治の生活が出来る²⁰⁾」とされている。一方「美しき相互扶助の精神、自主自治の精神が農村には可成り深く漲って居り、それが都会に遠ければ遠い程資本主義に毒されず未だにその美風を蔽存してゐる²¹⁾」とされる。結局農村が自由連合すれば理想的新社会が現出すると考えられていた²²⁾。それに対して都市労働者はどうすべきか。必需品生産従事者以外の「職工さん達の大部分は、現にやってゐる職業を自分自ら一日も早く壊す様にすべきである²³⁾」というのである。総じて前段階より主張は明確になってきている。実際の運動については、この時代は農村運動連盟や埼玉小作人組合によって、若干の演説会や小作爭議支援がなされていた。

〔農自批判へ(1928~29年)〕農自への態度は1928年初めより一転して批判的となっていた。農自はなお非政友会同盟等の具体的戦術を展開していくが、そこから自連派アナキストは手を引く。ちょうど全国自連の分裂時期と合致する。自連派の農自批判は、農自幹部の個人批判に加え農自の「改良主義的妥協的²⁴⁾」「協調的実利主義²⁵⁾」的態度へ向けられた。日常闘争全面否定の理論が農自評価にも及んだと解釈しうる。今や闘争よりもアナキズム理論の徹底を重んじる自連派は、農村の現実の中で実際に運動を展開しようとする農自の方向を許容できなくなったのである。相変らず、自連派は農民を「真の人間運動をやる代表的素質の人格を備へている²⁶⁾」とか、「美しい純真なる人情²⁷⁾」を持つと讃え、農村での建設的運動と都市労働者の破壊的自己否定的運動の協同を唱えて「社会革命は、農村革命であらねばならない²⁸⁾」、「都会運動は農村運動に附随する関係²⁹⁾」と論じていた。だが実際運動はどうか。1928年から1929年は常磐一般労働組合の農村宣伝活動、筑北農民組合と南予自主農民組合の誕生が『自由連合新聞』に見える程度で、低調きわまりなかった。理論の大枠は変化しないが実際運動を放棄する方向へ進んでいったといつてよい。

以上のように運動は終始低調であった。都市の労働運動もこの間一貫して衰退を続けるが、農村では初めから存在しなかったに等しい。それにもかかわらず、「アナキズムは本質的に、その理想において、実現においてより農村に矛を向く可きである³⁰⁾」と農村が重視されていた。本章のおわりに1929年頃までの彼らの農村運動論を整理しておこう。

- ① 都市の労働者を含めて、都市が農村を搾取しているとする。
- ② 革命運動の主力部隊を農民に見、将来社会の基礎も農村に見る。
- ③ 自給自足を指向し、それによる都市の廃滅を期する。

第2章 農村運動論の動揺

〔農民自由連合時代(1930年)〕『農民自由連合』(同年6月と8月)は、小作人社、農村運動連盟の運動を引き継ぐ形で、同名の団体から発刊された。ここで主張にやや変化が起こる。従来の

「都会は農村を搾取する」が否定されるのである。農民が唯一の非搾取階級であることを否定し、「非常に複雑な搾取の網」の下で「万人が万人を搾取する³¹⁾」のであって農民も例外ではなく、農民生活も「他のあらゆる産業と同様に、分業的組織の所産たる不具的存在でしかない³²⁾」とされた。今や都会と農村、農民と非農民を対立的に論じるのはマルクスの資本家・労働者の対立図式の援用で、都会労働者と農民の共闘を妨げる論だと決めつけ、両者の共闘で都会を解体し、搾取の根源である分業と資本主義を廃止しようと主張する。要約すれば、従前どおり都会を否定し、都会の運動の目的を都会解体におくが、農民と労働者を対立視する部分を消去し、相互協力をとらえたのであった。

以上は農民派の「農民自治主義」批判に関連して述べられた主張である。農民派は農自の系譜も加えて以前から自連派より明瞭に都会と農村の対立や農業の優越性、農民の革命性を論じていたが、1930年に最盛期を迎え、『婦人戦線』『解放戦線』等の友誌が並び立ち雑誌の発行部数も増加した。農民派隆盛に対する自連派の対抗意識が、自らも従来論じていた主張を否定する結果を招いたものだろう。

なお農民自由連合の時代には、実際の農村運動は正しく皆無であった。

〔農村青年社（1931～32年）〕農村青年社（農青）といえば、1935年に大檢舉の始まる農村青年社事件、とくに「所謂信州暴動計画」が有名であるが、彼らの農村運動論はどのようなものであったろうか³³⁾。

農青の理論——農青イズム——は1931年2月の農青成立に先立って登場した。『黒旗』同年2月号付録、添田晋（宮崎晃の筆名）の「農民に訴ふ³⁴⁾」が農青イズムの根幹であり、宮崎の提唱に賛同した星野準二、鈴木靖之、八木秋子ら（いずれも自連派）が農青結成を決定したのであった。

「農民に訴ふ」の新しさは、農民自身による自給自足、共産、相互扶助の実行を三大眼目とする具体的な経済的直接行動の提唱にあった。農民の手で金の不要な社会を作ろう、物々交換もせずに村で自給し、塩等の不可欠品のみ村々間で融通しよう。たとえ一時的に原始手工業の時代にもどっても、やがて都市労働者の帰村で農村工業が整備されるだろうという。納税や小作料納付、借金返済は行なわない。当然支配階級が暴圧をかけてくるだろうが、その時は民衆が立ち上がり防衛するだろうと述べられている。

農青イズムは、自連派の現状に対する厳しい批判の面もあった。当時の自連派、特にその中の黒連（黒色青年連盟）メンバーらの純正アナキズム高唱に安んじ、他の主張を否定して暴力的にそれらを排除しようとする独善的態度に対して、農青は「結成主義」と呼び、セクト化した自連・黒連の解散と全村運動の必要を訴え、思想宣伝から実践への転換を提起したのである³⁵⁾。

長野地裁予審調査では農青イズムは「運動形態を分散連合の自主行動におき、農村へのアナキズム思想の浸透を通じて、アナキズム革命へ動向づけ自主的、自給自足の実践たる全村運動に誘導し、烽起単位たる各地理区画の緊密なる連絡のもとに、建設的暴力によって同時烽起にまで昂揚し、都市アナキストをして、都市焼却の役割を演ぜしめつつ、各地理区画に自由村落の自由連合により、現政治権力等一切の強権および現経済機構の壊滅したる社会を建設すべしとなし³⁶⁾」とまとめられている。その実現可能性はともかく、画期的な点は机上理論にとどめず実際に計画を進めようとした事である。農青イズム普及のための文書の配布や地方行脚、各地方での以前か

らの活動家による支持者拡大運動が精力的に行なわれ、長野では青年団報に「農民に訴ふ」が掲載された村もあり、多くの青年を引きつけたといわれる。日常闘争に関しても、従来の全面否定から積極的評価へ転換した。

当時『自由連合新聞』紙上には、農青が批判していた黒連のメンバーによって、「不純分子の徹底的掃蕩を期す³⁷⁾」といった非難がいくつか登場したが、農青が運動の現状を批判し新たに実践活動に踏み出したことがアナキストの一部にインパクトを与え、この後、安住から模索へ、方向転換へと進ませる原因のひとつとなったことは疑いない。

第3章 自連派の方向転換

〔八太舟三の転換（1932年初め）〕自連派内の反省と論調変化をよく示すものに、岩佐作太郎とともに自連派の理論家的存在であった八太舟三の最後の文章「現下の問題³⁸⁾」がある。1930年には「根本的に間違った社会では、部分的に、一時的に、何をやっても真の救済にはなりません³⁹⁾」とすべての運動を否定するが如き論を述べ、真の共同社会をいかにして建設するかの問題については発言がなかった。ところが空白期間をはさみ、1932年には「今は資本主義の時代である。……一切は商的行為である。……故に我々も商的行為をなして、民衆の中に這入り込み、商的行為を通して民衆の中に這入り込むべきである⁴⁰⁾」、「今や民衆運動へ向って行くより外この国では力は得られない⁴¹⁾」と述べるに至る。八太の方向転換の裏には「この国のこの有様では何をやっても共産党のごとくに精鋭分子を失うばかり⁴²⁾」という認識に窺われる左翼大弾圧の衝撃等もあったであろうが、それ以上に自連派の衰微状況への反省があると考えられる。

〔農本主義批判（1932年より）〕八太の「現下の問題」の頃から、次のような新しい論議が『自由連合新聞』に登場する。1930～31年に同じくアナ系の農民派の「農民自治主義」「重農主義」への批判がなされたことは前章で少し触れた。1931年末頃に農民派は分裂し、ある者は農民優位主義を撤回し、ある者は日本村治派同盟や農本連盟に加わり、「農民自治主義」を標榜する集団としての農民派は消散してしまった。代わって1932年初めより自連派が批判の対象とした「農民自治主義」は、同じ名称ではあるがアナ系の主張ではなく右派のそれであった。

1931年11月、多様な農本的傾向の人々の大同団結で日本村治派同盟が成立し、翌年3月にその中の農民運動を志向する者が農本連盟を結成、4月には農本連盟内の政治運動進出派の長野朗らが自治農民協議会をつくった。（もう一派の岡本利吉らは先駆者同盟となる）農業恐慌下の1932年春より、自治農民協議会を中心に農村モラトリウム等の施策を求める請願運動が大規模に展開され、農村窮乏対策のために開かれた第62, 63両臨時議会に向けて集まった署名は、それぞれ5～6万人、10万人⁴³⁾に達し世間に注目された。この運動はその後も議会開会のたびに署名運動、議員訪問、米作者大会等をつけ、五・一五事件への農民決死隊の参加と共に、農村窮乏問題のクローズ・アップに一役を買った。

自連派の「農民自治主義」「重農主義」「農本主義」批判は、日本村治派、愛郷会、自治農民協議会、千葉農民自治連盟、茨城農民自治協議会等一連の団体を対象とし、「反動的」と決めつけるだけでなく、それらとアナキズムを混同する世間の誤解を解くために両者の相異点の説明も行った。たとえば「宣言」の中に「わが建国の精神」、「皇室を捧持」、「わが国体の基礎⁴⁴⁾」といった語が頻出する自治農民協議会をはじめ、それらの団体は皇室・国体の存続発展を願う事を前

提とした点で、自連派とは全く異質である。しかし、都会否定や農民自治の高唱は共通していたし、また皇室や国体に関して特に言及していない団体もあったから、混同されるのも無理はなかった。アナキストを自称していた者でこれらの団体へ加わった者があったことも混同の原因となったであろう⁴⁵⁾。

自連派による農本主義者との相異点の説明をまとめれば次のようになる。() 内が自連派の「農本主義」批判と主張である⁴⁶⁾。

- ① 彼らは農業を原生産として特別の地位と見做し、工業は加工生産と規定する（これは農工分離の肯定である、農業は土地以外の生産手段も必要とし工業と本質的に異なるものではない）
- ② 社会変革の主体と将来社会の基礎を農民のみにおく（回顧的復古的思想で近代的工業の機械生産を退化させ農民と労働者の連合を妨げる考え方である、農工に上下はない）
- ③ 都市と農村の対立を強調し都市民衆が農民を搾取するという（現在では事実だがその原因は資本主義であり、農労の連合は可能）
- ④ 変革手段では権力肯定、政治運動進出を唱える（自治をいうなら議会に頼らず自分たち自身で実現すべきである、政治・権力は排撃すべきだ）
- ⑤ 共働農場や消費組合を設けて自給自足主義によって都市を廃滅しようとする者（岡本利吉派——三原）もいる（これは彌縫策であり資本主義をなくさねば解決しない）

以上の農本主義者の主張とされるものの中で、④はアナ系が常にその否定を前提としてきた項目であるから除くとして、他を見ると、①はアナ系の農民派（とりわけ鍵田研一）が長く論じてきた主張で、自連派も1929年までは農業生産の特殊性を肯定してきた。②③は自連派の農村運動論そのものであった。⑤も自連派が長く暗示し、農青の掲げた方向と類似する。要するにここに至り自連派はかつての自らの主張を否定したことになる。批判を展開した論文が他にないので詳細は不明だが、少なくとも産業における農業、職業における農民、地域における農村を特殊な優位にたつべきものとする考え方や、農民・農村の相互扶助的精神を評価して都会を、労働者を含めて敵視したかつての主張を放棄したと見られる。残るは、政治運動によらない農労連合による資本主義打倒運動という抽象的方向性のみで、何ら具体的な方策はない。

〔新方針（1933年より）〕1933年1月号から『自由連合新聞』の紙面はがらりと様相を変えた。編集部が全国自連から独立し自由連合新聞社となったという形式的変化もさることながら、従来の運動放棄的態度が一転して、実際運動への強烈な志向が現われ、「日常闘争」がさかんに奨励されるようになったのである。「日常闘争」は、機関紙や講演会による思想宣伝と異なり、生活難等具体的問題に対する闘争で、農村では小作料問題が代表的な課題である。

まず従来の運動を自己批判し、内部間闘争に精力を集中して「現実的な社会の諸問題に対する無政府主義者としての積極的な闘争がなされなかった」こと、特異な生活態度によって目立つだけの「看板」的存在となって弾圧を蒙り、日常的諸問題に対しては批判観察するのみであったことを認めた⁴⁷⁾。そして今後は農民組合等の大衆団体を「大衆自身が今日の窮乏せる生活を改善したり維持したりする為に組織せるもので……一個の思想によって規定されることは不可能⁴⁸⁾」と認めた上で、大衆運動を積極的に評価し、アナキストはそこに参加することによって人々に「闘争の中のみ勝利があるの信念を抱かしめると同時に、農民の意識水準を絶えず無政府主義に迄昂揚すべく力を致さねばならぬ⁴⁹⁾」とされた。旧来の自連派は大衆運動ぬきで少数のアナキ

ストによる働きかけを構想していたが、今度は「アナキズム運動は無政府主義者の鼓舞による大衆運動⁵⁰⁾」であると両者の役割が規定され、日常闘争一大衆運動の重要性が一挙に高められたのである。

戦術面では全農や全農全会派その他の小作人組合、青年団、処女会等に「潜入」して働きかけることが奨励された。長野県北佐久で農自、農青以来の活動家、南沢袈裟松らが全会派系組合内での運動を進めるなど、各地で「潜入」が実行された。

こうした方向転換の結果、やがて1935年には「(以前の誤りが)ここ二、三年の農村同志の農民闘争への参加に依る体験で漸次克服され、現在では積極的な農民大衆への喰込み、大衆運動への参加がなされ、地方小作人組合の設立、全農や他の農民組織内のフラクション活動が果敢に行はれている⁵¹⁾」と、多少明るく見通されるに至った。

自連派の思想宣伝路線から日常闘争第一主義への転換には日本無政府共産党(当初は日本無政府共産主義者連盟、以下党と略す)との関係もあった⁵²⁾。党結成に働いた相沢尚夫は1933年1月より『自由連合新聞』の編集責任者となり、全国自連の活動家も数人が党に参加した。党の結成は同年11月末であるが、それ以前、紙面一新の頃から相沢らの党構想が紙上に提示されたとしてよいだろう。『自由連合新聞』は党結成後に党の準機関紙となったが、その前から「アナーキスト団体」の語が頻出し、それは党をさしている。

党は自連派アナキストを中心にして、中央集権的組織をもったアナキスト秘密結社としてつくられた。一般に党的存在を嫌忌するアナキストが革命後の社会建設に関するクロボトキンのオプチミズムを問い直した結果、革命を強権的な結果に終わらせないためにはアナキストの強力な指導によって国家を廃止する必要があると考えて、革命運動において大衆団体をひきいる党の存在の必要性を認めたのであった。党の「テーゼ⁵³⁾」の内容はレーニンの革命論に近く、「テーゼ」自身が、レーニンとの相異は国家が死滅するか積極的に廃棄すべきか、プロレタリア階級が農民を指導するか両者は同列に並ぶか、の二点であると説明している。

全国自連等の大衆団体は党の指導下におかれるが、その運動の活性化は当然革命にとって重要となる。前述の日常闘争第一主義への転換は、党の方針が表明されたものであろうが、その背景には沈滞状態打破の必要を痛感する多くのアナキストの姿があったろう。

方針転換によって、農村運動の活発化と同時に論の上では農民や農村への思い入れが消えたように見える。実際に耕作する農民をほぼ一括して論じた旧状と異なり、農民層をマルクス主義理論によって分類して「運動の主体を農業労働者、小作農民に置かねばならない⁵⁴⁾」とし、自作農は「腰のさだまらぬ層⁵⁵⁾」と評された。都会批判は姿を消し、農村困窮の原因分析も見られない。「民衆の安定な生活の確保を叫ぶアナーキストはたとへ資本主義社会に於ける一時的な安定のためにしる積極的には闘はねばならぬ⁵⁶⁾」、「一切の農民闘争を通じて農民大衆の結集、我々の組織確立へ!」⁵⁷⁾と、ひたすら日常闘争をアジるのであった。

その後、日常闘争路線とは別に進められていた党の資金獲得活動が独走し、1935年に殺人事件、銀行襲撃事件によってメンバーが逮捕され、農村青年社事件も発覚して全国のアナキスト検挙に及び、運動はほぼ壊滅した。

終章 アナキズムと農本主義的傾向

自連派農村運動論を概観して、いわゆる農本主義が台頭するまでの約10年間の自連派は、実際活動の都会偏在にもかかわらず、理論と志向において農民・農村を重要視し、しばしば激しい都会憎悪を示したこと、その後1932年頃より農を重んじる姿勢を放棄し、さらに日本無政府共産党と共に日常闘争第一主義へ転換して農民・農村への思い入れを失ない、理論的にはマルクス、レーニンに依拠するに至ったこと、が明らかになった。

1932年以後の変化については次のように考える。まず右派的体制的に映ずる農本主義運動と混同されることを拒絶し、農本主義との相異点や自らの思想の性格を明らかにする際に、運動が衰退を極めたあせりの中で根本的相異を確認することなく、安易に共通部分と見做されやすい点を否定したのである。さらに楽観主義の批判克服をはかってアナキストが否定してきた党の結成を一旦認めたのちは、運動理論の細部にわたっても過去の方針を全面的に非とし、代わって「ボル」と批難していた理論を借用するに至ったのである。二段階共に、根本的な再考のゆとりがないままにその場しのぎの安易な進路をとったといえよう。既に1930年の農民派に対する対抗の仕方にも見られたことである。

それでは修正以前の自連派の農村運動論といわゆる農本主義の「根本的相異」とは何か。まず共通主張としては、①、都市の農村搾取、②、農民への期待、③、都市の廃滅の3点があると考えられるが、この問題を考えるとき、自連派の理論形成期には反都市反工業反中央集権的意識が広く見られたことに注意しておく必要がある。

鈴木正幸氏は「大正期農民政治思想の一側面⁵⁹⁾」において「農村中間層の農本主義的運動が出てくるのは、昭和恐慌による農村解体の結果である」とする従来の説への疑問を解くために農村中間層、「亜インテリ層」の青年の意識解明を試みている。大正前半期、日露戦後の農村窮乏によって次第に増大する“向都熱”に対して、それを批判し農村衰退を憂い、自ら救済にあたろうとする農村青年が出現した。彼らの意識形成には農業関係ジャーナリズムの「農本主義的」主張が影響している。大正後半期、農村衰退の危機感は一層深刻化する。恐慌によるシェーレの拡大や小作争議激化による農業一般の危機の認識によって反商工主義・反都会主義的意識が現われ、同時に農村衰退に手をこまねく「商工偏重の政府・既成政党への反発」が起こる。こうして普選実現が迫ったこの時期に、青年らは農村救済のための農民党結成、議会進出へと進んだという。

日農の機関紙『土地と自由』(1922.1~'24.22)を見ても、初めの頃は「近代の都会中心文明」「物質文明」への批判や都市への反感が散見され、大震災による東京市街の被災は都市文明に対する天罰だとする論さえあった⁶⁰⁾。日農設立は当時盛んだったアナルコサンジカリズムの農村への進出を危惧し穏健な組合運動の進展を意図したもので、当初は協調主義を掲げ、のちになってから小作争議の現実的教訓とマルクス主義の活動家の増加によって反地主の理論が形成されていたのである。理論形成以前の初期日農の都会への反感は当時の農村にそうした意識が存在したことを示すものだろう。

自連派の人々はまずこうした意識の中にあつたが、同時に彼らにはアナキズムの問題がある。日本のアナキストの中でもとくに彼らが重んじたクロボトキンの主張を見よう。

まずクロボトキンは地主・国家・銀行家のほかに商工業者も農民を搾取すると述べている⁶¹⁾。農村衰退と都市繁栄の対照的事実を前にした自連派が都市の農村搾取という理論を展開するにあ

たって、クロボトキンを援軍としたことは十分考えられることである。また彼は消費経済において生存に不可欠の食物供給を最重要視し、農業を「場末の暗い工場」と対照的な「一番愉快な」職業と描き出した⁶¹⁾。また相互扶助的社会生活の場も現在より過去に、都会より農村に見ていた⁶²⁾。自連派の人々がこうした農村観に自分の美化されがちな故郷の思い出を重ね合わせて農村を描き出しても不思議ではない。さらに彼は物の交換の多くを無用・有害として、各地方での自給の有利性、都市労働者の帰村、革命後に一人が農工両方に従事する必要性を説いている⁶³⁾。マルクス主義を拒否するが故に工場労働者への階級的期待や生産力発展志向を持たない自連派が、クロボトキンの主張と当時の現実から都市の農村搾取と都市廃滅の必要性を論ずるに至ったことはごく自然であったといえよう。

しかし、クロボトキンには都市への怨みや労働者への反感といったニュアンスは見られない。彼にとっては都市も労働者も反感情を投ずるまでもなく、革命の暁には必然的に廃滅される存在であった。革命で都市への食糧供給が減少した時、労働者はどうするか。彼は信ずる、「店倉が空になれば、民衆は土地から其食物を得やうとするに違ひない⁶⁴⁾」、労働者は「市街を去って田野に行く！⁶⁵⁾」。自連派の人々の感情的都市批判については当時の反都市反商工的意識の影響が大きいのであろう。

もう一点、クロボトキンが工業と農業の技術的發展に楽観的な展望を持ったのに対し、自連派にはそれが見られない。彼は現体制下でさえ工業は電力利用によって集中分業から分散に向かい、農業では温室等の利用で集約農法と機械使用が進んでいること、農工の合体が必然的な方向であることを多数の実例をあげて論じた⁶⁶⁾。自連派における進歩的展望の不在は共同体志向と相俟って回帰的傾向を付加したことも否めない。

以上にみたようにクロボトキンは反都市反商工的傾向を否定するよりも助長する役割を果たしているものである。

自連派のよって立つ基盤が明らかになったところで、それでは根本的相異点はどこにあるか。農本主義では常に天皇との関連が指摘されるが、自連派は皇室や国体の破壊を意図しこそすれ存続発展を願うようなことはない。反国家反政治はアナキズムの大前提であり、これこそ彼らがいかに農へ傾斜してもアナキストである限り譲ることのできない点である。農民の村落における自治を理想とする場合でも、アナキストは皇室等の国家機関の不在を想い、いわゆる農本主義者は自治社会を基礎としてその上に皇室等が栄えることを想うという違いがある。それが根本的相異点ではないだろうか。

しかし、その後のアナキストの転向のいくつかは、「反政治」の間隙を縫って、一見非政治的存在に写る天皇や一見自然な生成体に見える日本国家に足をとられたのであった。反国家を掲げるアナキストの陥ったこの問題については、他日改めて論じたい。

註

- 1) 増補版『現代政治の思想と行動』1964年 p. 46。
- 2) 『農本主義と近代』1979年 pp. 184～5
- 3) 石川三四郎『哲人カアベンター』1912年（『石川三四郎選集』第5巻1983年所収）参照。
- 4) 鎌田研一「トルストイの重農主義」『農民』1927. 10参照。
- 5) 秋山清「ある農本主義との論争」『黒の手帳』第3号（1967. 9）参照。

三原：戦前アナキズム運動の農村運動論

- 6) 日本アナキズム史については小松隆二『日本アナキズム運動史』1972年、秋山清『日本の反逆思想』1977年増補版等を参照。
- 7) 八太舟三『階級闘争説の誤謬』1929年 p.30.『八太舟三全集』1981年では p.230。
- 8) 『労働運動』1921.2.1 p.5。
- 9) 『小作人』1922.10 p.1。
- 10) 同上 1924.2 p.4。
- 11) 同上 1922.12 p.6。
- 12) 同上 1923.4 p.3。
- 13) 同上 1922.2 p.7。
- 14) 11)に同じ。
- 15) (1870～1936) ロシア人アナキスト、革命後の1919年末から1921年にロシア滞在。
- 16) 大井隆男『農民自治運動史』1980年、渋谷定輔『農民哀史』1970年等を参照。
- 17) 『小作人』1926.11 p.1の表題ほか。
- 18)19) 同上 1927.5 p.1。
- 20) 同上 1926.11 p.1。
- 21) 同上 1927.8 p.6。
- 22) 18)に同じ、ほか。
- 23) 同上 1926.11 p.3。
- 24) 『自由連合』25号(1928.7) 復刻版 p.202。以下も『自由連合(新聞)』では復刻版の頁を示す。
- 25) 『小作人』1928.2 p.5。
- 26) 同上 1928.7 p.3。
- 27) 同上 1928.7 p.9。
- 28) 同上 1928.2 p.3。
- 29) 26)に同じ
- 30) 『自由連合新聞』32号(1929.2) p.232。
- 31) 『農民自由連合』1930.6 p.6 と p.13。
- 32) 同上 p.14。
- 33) 農村青年社運動史刊行会『農村青年社運動史』1972年参照。司法省刑事局の『「農村青年社」資料』1936年は、鈴木が検挙後に書いた手記が多く、取扱いに注意が必要である。
- 34) 1930年5～6月号の添田晋の同表題論文は別の一般的啓蒙的内容で当時の自連派農村運動論の典型の一つである。
- 35) 特に『最近運動の組織及び形態に就いての一提案』(1931.8)と『如何に為すべきか』(1931.7)の小冊子を参照。
- 36) 33)のp.144による。宮崎はこの要約を「農青運動の本質をきわめて端的に示している」と評価している。(p.152)
- 37) 『自由連合新聞』66号(1932.1) p.350
- 38) 同上 66号(1932.1) p.348。『八太舟三全集』では pp.148～9。
- 39) 『農民自由連合』1930.6。『八太舟三全集』では p.64
- 40)～42) 38)に同じ。
- 43) 長野朗『昭和農民総躍起録』1966年 p.29 と p.36。内務省の『社会運動の状況』では18,887名と42,500名になっている。
- 44) 長野朗前掲書 p.21。
- 45) 村治派、農本連盟へ加藤一夫、犬田卯ら、自治農民協議会へ宮越信一郎らが参加した。
- 46) 『自由連合新聞』71号(1932.6) p.364の「農本主義の正体」と75号(1932.11) p.372の「無政府主義と農本主義を／ゴッチャにする……」を中心にまとめた。
- 47) 同上 76号(1933.1) p.374。
- 48) 同上 79号(1933.4) p.384。

- 49) 同上 85号 (1933.10) p.407。
- 50) 同上 78号 (1933.3) p.380。
- 51) 同上 97号 (1935.1) p.452。
- 52) 相沢尚夫他『日本無政府共産党』1974年参照。
- 53) 52)に所収, 筆者は相沢尚夫。
- 54)~56) 『闘ふ農民』(『自由連合新聞』付録) 1933.10 復刻版 pp.461~2。
- 57) 『自由連合新聞』97号 (1935.1) p.452。
- 58) 『日本史研究』173, 174号 (1972.1~2) 所収。
- 59) 21号 (1923.9) の仁科雄一「農民問題」。
- 60) 『麵炮の略取』岩波文庫版1960年 p.263等。
- 61) 同上 p.267等。
- 62) 『相互扶助論』『倫理学』参照。
- 63) 『麵炮の略取』p.261, p.251, p.111等。
- 64) 同上 p.253。
- 65) 同上 p.281。
- 66) 『田園・工場・仕事場』参照。

(博士後期課程)